

〔翻 訳〕(Übersetzung)

ハンス・ヴィスリング 『魔の山』研究覚え書き(2)

(ヘルムート・コープマン編『トーマス・マン＝ハンドブック』)

S・フィッシャー・ポケットブック出版社 2005年 408-421ページ所収)

六 浦 英 文 訳

第二部 「死への共感」(Sympathie mit dem Tode) に対するさまざまな抵抗力 (ナフター雪の中の夢—ペーパーコルン)

小説のこの第二部で、カストルプは、自分を「死への共感」から引き離し、ニヒリスティックな傾向を正常に戻してくれると思われる、いくつかの思考実験を行う。それは、トーマス・マンが、1918年以降にみずから行った実験、すなわち、共産主義的精神性と中世の神の国との結合(ナフタ)、死をも含む人文主義的ユートピア(雪の中の夢)、ゲーテ的生の肯定とニーチェ的生の肯定との結合(ペーパーコルン)という実験である。これらの実験のすべては、著者によって、戦前の主人公に要求されていたものである。肯定的な目標設定によって、主人公を重荷から解放する試みが眼目である。

主人公が、二人の人物から受け入れ、夢で見た幻覚の中で感受した刺激と洞察はどこにあるのだろうか。

ナフタは、きわめて多面的な人物であり、その矛盾性によって、すでに多くの解釈者を混乱に陥れた。ナフタは、イエズス会士であると同時に、共産主義者であり東方ユダヤ人でもある、したがって、少なくとも三つの極端な精神的立場と見解を代表している。小説構造の内部では、ナフタは、セテンプリーニの対立者(Gegenfigur)である。したがって、理性のではなく、神秘主義の代弁者であり支持者である。活動ではなく、瞑想の、健康・生の享受・肉体美ではなく、病気・禁欲・苦悩の、民主主義ではなく、全体主義的な神の国の、進歩ではなく、反動の、国際仲裁裁判所のある世界共和国ではなく、正義の戦争の、裕福ではなく、貧困の代弁者であり支持者である。構造記号言語であらわすと、「形式」(Form)ではなく、「超形式」(Überform)の代弁者であり支持者である。

これは、実にさまざまな精神史の領域を含んでいる。まず第一に、宗教的・教会的な領域について。ナフタの住まいにはゴシック様式のピエタ像がある(GKFA 5.1, 592/III, 544)。ナフタは瞑想の場所として自分の「寝椅子」(Ruhebett)を賛美する——ベルンハルト・フォン・クレルヴォー(Bernhard von Clairvaux)と大教皇グレゴリウス(Gregor

der Grosse) (GKFA 5.1, 568, 606/ III, 522, 557) は、ナフタの聖人である。イグナーツィウス・フォン・ロヨラ (Ignatius von Loyola) の弟子として、ナフタは、最も厳格な規律を支持する。すなわち、肉体を支配下に置き、精神を硬直した軌道へ導く訓練 (exercitia) を支持する。襷のあるスペイン風の襟飾りは、ナフタの場合、位階制、貴族性の高貴、権力、抑圧、異端審問に賛成の立場をあらわす。ナフタが戦争を支持するのは、戦争だけが、人間の兵士としての美德、すなわち、死への心構え、殺すことの心の準備、服従、質素、無常さを発露させるからである。ナフタは、世界を、拷問室、笞刑の場と見なし、鞭打ちの刑、死刑を要求する。これらすべては、苦悩、キリスト教的な血と傷の崇拜、に対するナフタの尊崇の念と関係がある。疲労困憊するまで禁欲的でありながら、血を流すことも辞さないで、「神の国、超自然的なものの世界支配」(Gottesstaat, die Weltherrschaft des Übernatürlichen) (GKFA 5.1, 676/ III, 620) を招来しようとする中世の好戦的な修道士のタイプについて、ナフタは語る。

このことは、現代にも当てはまるはずである。すなわち、キリスト教的な神の国は、「プロレタリアート（無産階級）の独裁」(Diktatur des Proletariats) と同じく暴力によって獲得できることになる。地上での神の国は、「市民的・資本主義的な腐敗」(bürgerlich-kapitalistische[] Verrottung) と対立させられなければならない。その際、テロと死は避けられてはならない——手段の徹底性においても、神の国と共産主義的世界支配とは同じである。中世キリスト教と共産主義との精神性が似ていることに、トーマス・マンが非常に驚いたことが、1919年の日記に記されている。マンは、ハインリヒ・フォン・アイケン (Heinrich von Eicken) の『中世の世界観』(*Mittelalterliche Weltanschauung*) についての書物、ノヴァーリス (Novalis) の論文『キリスト教徒あるいはヨーロッパ』(*Die Christenheit oder Europa*) を読んだ。ブルガーコフ (Michail [Mikhail] Afanasjewitsch Bulgakow [Bulgakov] / Михайл Афанасьевич Булгаков), ブロッホ (Ernst Bloch) などの報告書や理論書の中で、マンは、ロシア革命に出会った。トーマス・マンが、心を寄せた「保守的革命」(konservativ[e] Revolution) の中には、極右的思想と極左的思想とがほとんど出そろっている。マンにとって、背景に存在しているのは、シュペングラー (Oswald Spengler) (『プロイセン精神と社会主義』(*Preußentum und Sozialismus*) であり、ボイムラー (Alfred Baeumler) であり、ブリューアー (Hans Blüher) である。この路線は国民社会主義に通じている。他方、いわゆる共産主義的作家もいて、その影響は、日常的な出来事によって制限を受けた。トーマス・マンは、レーテ [評議会] 共和国、リープクネヒト (Karl Liebknecht) とルクセンブルク (Rosa Luxemburg), のちにはアルコ (Anton Graf von Arco) とラーテナウ (Walther Rathenau) についての報道を不安と嫌悪の念を抱いて追跡していた。

ところで、これに付け加えると、ナフタもユダヤ人である。これもまた、当時の出来事に直接の原因がある。トーマス・マンは、トロツキー (Leo [Leon/Lew] Dawidowitsch Trotzki [Trotzkii] / Лев Давидович Троцкий, 本名 Бронштейн) のみならず、ミュンヒエン評議会共和国最後の指導者オイゲン・レヴィーネ (Eugen Leviné) の中にもみられるロ

シア系ユダヤ人の革命家タイプを知っていた。1919年5月2日の日記に、マンはこう記している。

私たちはまた、世界運動の指導者となっているロシア系ユダヤ人のタイプ、ユダヤ的な知的急進主義とスラブ的キリスト崇拜から成るこの爆薬の混合のことを話し合った。世界は、まだ自己保存本能を持っているなら、あらん限りのエネルギーと即決裁判の迅速さでもって、この種の輩に対処しなければならない。

Wir sprachen auch von dem Typus des russischen Juden, des Führers der Weltbewegung, dieser sprengstoffhaften Mischung aus jüdischem Intellektual-Radikalismus und slawischer Christus-Schwärmerei. Eine Welt, die noch Selbsterhaltungsinstinkt besitzt, muß mit aller aufbietbaren Energie und standrechtlichen Kürze gegen diesen Menschenschlag vorgehen.

マックス・シュタイナー (Max Steiner)——『時代遅れの現代自由思想家精神』(*Die Rückständigkeit des modernen Freidenkertums*, 1905), 『啓蒙の世界』(*Die Welt der Aufklärung*, 1912)——も、カトリック主義に改宗したユダヤ人であったことを、マンは知っていたのかどうか? その後、1922年1月に、ブダペストで、マンは、ルカーチ・ジェルジ (Lukács György) と出会った。ルカーチは、初期の観念論的立場(『魂と形式』*Die Seele und die Form*, 1911)を放棄しており、共産主義者になっていた。この毒舌家の改宗者が、ナフタのモデルになった。

「ユダヤ的な知的急進主義とスラブ的キリスト崇拜」(*Jüdischer Intellektual-Radikalismus und slawische Christus-Schwärmerei*), すなわち、この定式は、ナフタの全体を包括していないとしても、ナフタに当てはまる。ナフタについての自伝の中で、トーマス・マンは、さまざまな特徴を、混ぜ合わせて一つにしようと試みている(GKFA 5.1, 663f./ III, 608f.)。ナフタは、ポーランド南東部のガリツィア地方とウクライナ北西部のボリン〔ヴォルィーニ〕地方との境界に近い小さな村で生まれた。ナフタの父は屠殺者であり、モーセ(Mose)のおきてに従って命を奪うとはいえ、その人柄に祭司の面影を宿している。その息子ナフタは、父が大きな屠殺刀を振るうとき、父の目が放った星の光を、今なお覚えている。敬虔なところと血の匂いと混合が、息子ナフタに引き継がれている。若きナフタは、迫害により故郷を追放され、故郷の代用物として、社会主義(Sozialismus)とイエズス会精神(Jesuitentum)を知るようになる。それゆえ、ナフタが絶対性、独裁(全能)、テロに傾くのも、弱点から、つまり、故郷喪失と孤立無援状態から説明できる——こうして、ナフタは、サヴォナローラ(Girolamo Savonarola)の後継者として才能を発揮する。

この人物の何にトーマス・マンは魅せられるのか。何がマンをいらだたせるのか。トーマス・マンの日記の発言から読み取れるのは、さまざまな経験と評価である。その一つは、複合した複雑なものから、——たとえ、暴力の助けを借りなければ実現できないとしても

——単純明快なものへの、明白な関係性へのあこがれである。もう一つは、自己を絶対的なものと見なす考え方は、常に、容認と妥協の精神の中でしか存在し得ない生を殺してしまう、という認識である。

ハンス・カストルプの目には、ナフタとセテンブリーニとの間の論争は「大混乱」(große[] Konfusion)に陥っているように見える。

いやはや、原理と意見が、絶えず縄張りを侵しあい、内的矛盾だらけで、市民的責任感にとっては、もろもろの対立の中で自己をそのどちらかに決定することはもとより、対立をプレパラートとして分類し汚れなく保存することすらも並々ならず困難で、ナフタの「道義的に無秩序な全体」の中へ真逆さまに飛び込みたい誘惑が大きかった。それは全体的な交錯、絡み合い、大混乱であった。

Ach, die Prinzipien und Aspekte kamen einander beständig ins Gehege, an innerem Widerspruch war kein Mangel, und so außerordentlich schwer war es zivilistischer Verantwortlichkeit gemacht, nicht allein, sich zwischen den Gegensätzen zu entscheiden, sondern auch nur, sie als Präparate gesondert- und sauberzuhalten, daß die Versuchung groß war, sich kopfüber in Naphta's »sittlich ungeordnetes All« zu stürzen. Es war die allgemeine Überkreuzung und Verschränkung, die große Konfusion [...].(GKFA 5.1, 705/ III, 646)

カストルプは、「秩序と平明さ」(Ordnung und Klärung)を回復できる状態ではなかった。「二者が抗争するという形でそれすらも。なぜなら、すべてが衝突し合ったばかりでなく、雑然と入り乱れ、論者が互いに対立し合ったばかりか、自分自身に対しても矛盾撞着に陥ったからである。」(nicht einmal eine zweiheitliche und militante; denn alles ging nicht nur gegeneinander, sondern auch durcheinander, und nicht nur wechselseitig widersprachen sich die Disputanten, sondern sie lagen in Widerspruch auch mit sich selbst) (GKFA 5.1, 702/ III, 644) カストルプがここで得た経験は、トーマス・マンが、1909年に、計画中のエッセイ『精神と芸術』(*Geist und Kunst*)の仕事を中断するに至る知見と一致している。マンは、秩序と平明さを、概念の世界へ持ち込むことができなかった。精神と生(ニーチェ)、表象と意志(ショーペンハウアー)、精神と自然(ゲーテ)、情感的なものと素朴なもの(シラー[Friedrich von Schiller])という反対命題(Antithese/対照法/対句法)を一致させることはできなかった。世界についてのセテンブリーニとナフタとの間の論争で表現される言葉のジャングルは、カストルプのところに翼を与えるよりは、むしろ氣力を奪ってしまう。それからどう生きるべきかという問いには、依然として答えがないままである。

この答えは、次に続く「雪の中の夢」(Schneetraum)の章にあるのであろうか？ この解釈は、トーマス・マン研究の難問(Crux)である(し、あり続けている)。一方において、太陽の子ら(Sonnenleute[])と血の饗宴(Blutmahl)についてのカストルプの夢は、

小説全体のショーペンハウアー的構造線(Strukturlinie)を確証していることが指摘されている。すなわち、「形式」と「非形式/無形式」(Unform)とがこの夢の中でも対立しているというのだ。他の人々は、夢の初めの部分に、未来を肯定的な方向へ解放し、小説の構造の中に上昇線(Aufwärtslinie)という考え方を設定しようとする反対衝動(Gegenimpuls)を見る。このグループは、雪の中の夢とその認識の中に、小説全体の成果を見ることができると信じている。事実、この立場からすると、夢は、小説の最後に置かれることが望ましいであろう(DüD I, 509ページを参照せよ)。両解釈のどちらもが小説にはふさわしくない。これは個々に説明することになるであろう。

カストルプのスキーの散歩は、小説冒頭の旅の高められた繰り返しである。それは道なき道、危険極まりない道、カストルプが行ったことのない地帯へと続いていく(GKFA 5.1, 716-722/ III, 656-662)。すなわち、死の静寂が、孤独な旅人を迎え、氷のような虚無の恐怖が、白一色の超越世界の中で、その旅人を取り囲む。カストルプは、かつて碎ける波が獣のように襲ってきた海や、砂漠の砂嵐に感じたのと同じような恐怖を、一寸先も見えない吹雪の白さに感じているのだ。(これらはトーマス・マンの「形而上学的」(mata-physisch[])風景であり、海や雪原であり、個性からの退行、ひいては表象の世界を暗示する風景である)。この上り坂でも、カストルプは、方向感覚を失い、ぐるぐると歩き回り、時間の感覚を失い、無関心で死を招く無の脅威を目の当たりにして不安とめまいを感じる。

〔この世から〕加速するように退出を迫る状況の中で、人生の思い出の断片が、カストルプの脳裏をよぎる。すなわち、セテンブリーニの海岸監視員の角笛、——かつてナフタに引用された——神秘的な「ナベテノコノ世ノモノハ無常ナリ」(Praeterit figura hujus mundi) (GKFA 5.1, 720/ III, 660) ということば、雪の穴の青い光を放つ底から、「タタール人の切れ長の眼」(Tatarenschlitze)あるいは「ステップ狼の眼」(Steppenwolfslichter)を持った、ヒッペとクラウディアが、カストルプを見つめている (GKFA 5.1, 721/ III, 661)。心臓の〔ドキドキする〕鼓動が、〔パチパチ音を立てる〕レントゲン室で見た画像を思い出させる。〔冥府の判官〕ラダマンテウスがそこにいる (GKFA 5.1, 729/ III, 668)、スペイン風の黒衣〔をまとったある存在の暗示〕 (GKFA 5.1, 732/ III, 671)。「ぐるぐる回りをする」(im Kreise Herumkommen) 危険が、戯れのように意味深長に、回帰する(Umkommen) 危険と同等視される (GKFA 5.1, 735/ III, 674)。カストルプは、とうとう疲れ果てて、数時間前に後にした時と同じ山小屋の壁によりかかる——実際には、〔山小屋から〕15分の距離の範囲でさまよい歩いていたに過ぎなかった。カストルプが飲んだポートワインは、療養所に到着した晩に飲んだクルムバッハ・ビールの味を思い出させるものであったが、それが、カストルプを心地よい危険なまどろみに陥らせる。大鎌(ヒッペ!)のようにカストルプに切りかかる風も、そのまどろみから引き離すことがもはやできない。

夢は、しかし、根本的に新しい認識を与えてくれる。それは、すでに体験したこと、つまりすでに小説の中で描かれていることの単なる要約ではない。カストルプが目にする公

園は、「故郷の息吹き、低地の芳香と生命の充溢、久しく味わわずにいたもの」(Heimatoden, Duft und Fülle des Tieflandes, lang entbehrt) (GKFA 5.1, 738/ III, 677) に満たされている。それから、公園は、イタリア人テノール歌手の清らかな歌声の中で、「いや増す光明の中で」(in wachsender Verklärung), 変転していき、南国の風景になる。その風景は、カストルプに「地中海、たとえば、ナポリ、シチリア、あるいはギリシア」(das Mittelmeer, Neapel, Sizilien etwa oder Griechenland) を思い出させる。カストルプは、このような南国の風景を一度も見たことはなかった。にもかかわらず、「思い出した」(erinnerte) のである (GKFA 5.1, 740/ III, 678)。これは、もはや個人の思い出とはほとんど関係のないものである。幸福な「太陽と海の子ら」(Sonnen- und Meereskinder) (GKFA 5.1, 740/ III, 679) についての夢は、むしろ、黄金時代についての、パラダイスについての、昔から見られてきた夢である——「人類の夢」(Menschheitstraum) (フロイト/Sigmund Freud) である。そのことを、「人が夢を見るのは」(Man träumt) と、カストルプは、浅い夢を見ながら、あとで、正当化している。「自分の魂からだけでなく、それぞれに違ったものであっても、無名で共同で見えるものだ。[……] お前は、大きな魂の一部分にすぎないが、大きな魂は、多分、お前を通して夢見るのであろう。お前の場合はお前なりの形で、その大きな魂がいつも密かに夢見ていることを夢見るのだらう」(nicht nur aus eigener Seele, [...] man träumt anonym und gemeinsam, wenn auch auf eigene Art. Die Seele, von der du nur ein Teilchen, träumt wohl mal durch dich, auf deine Art, von Dingen, die sie heimlich immer träumt) (GKFA 5.1, 746/ III, 684)

この「美しい若者たち」(schöne junge Menschheit) (GKFA 5.1, 740/ III, 679) についての夢は、平地の世界を凌駕している。すなわち、若者たちは、桃源郷アルカディアの牧人のように行動する。若者たちは労働をしない、自然が養ってくれるのだ。カストルプが、それに語り掛けるのは、

ほとんど目には見えないながら、若者たちすべてに行きわたっているところの結びつきや、深く身に徹した理念の力で、互いにいつどこでも示しあう敬愛の情であった。気品と謹厳さ、とすら言ってよいものだが、それは晴朗なものへ溶け込んで、曇ることのない厳粛、聡明な敬虔さが名状しがたい精神的な影響力となって、若者たちの立ち居振舞を律しているのであった。

Ehrerbietung, die sie einander, unmerklich fast und doch kraft einer deutlich durch alle wsltenden Sinnesbindung und eingefleischten Idee, auf Schritt und Tritt erwiesen; eine Würde und Strenge sogar, doch ganz ins Heitere gelöst und einzig als ein unaussprechlicher geistiger Einfluß undüsteren Ernstes, verständiger Frömmigkeit ihr Tun und Lassen bestimmend. (GKFA 5.1, 742/ III, 680)

若者たちは、ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) の「教育州」(Pädagogisch[e] Provinz) における若い人々と同じ儀式により、会うときは、手を胸の前で交叉する (XII,

478 も参照せよ)。若者たちは、ルートヴィヒ・フォン・ホーフマン (Ludwig von Hofmann) の絵の麗しき青年たちと乙女らのように、遊び、踊る。ホーフマンは、1906年に、ゲーアハルト・ハウプトマン (Gerhart Hauptmann) のギリシア旅行に同伴していた。トーマス・マンは、1914年に、「泉」(*Die Quelle*) という絵を、ホーフマンから買った (DüD I, 452)。

それから、夢見る青年は、エジプト風のどっしりした神殿の門を見る。青年は、二番目の門を通り抜けた後で、列柱の森の中に、デーメーテルとペルセポネーの石像 (ein Demeter-und-Persephone-Steinbild [cf. Δημήτηρ; Περσεφόνη]) を見る。ここは重くなり、群像を迂回し、列柱の間を通り抜ける。

そこには神殿の内陣の金属の扉が開け放たれていた。この哀れな青年は、今しも目の当たりにしたものに身をこわばらせ、膝がくず折れんばかりになった。年老いた醜い女が二人、半裸で、髪を振り乱し、垂れ下がった魔女の乳房と、指の長さほどもある乳首を見せ、奥で揺らめき燃える火皿の光に照らされて、世にもおぞましい所業に耽っていた。一つの大皿の上で魔女たちは幼児を引き裂き、恐ろしくも平然として両手で引きちぎって、——ハンス・カストルプには血まみれになった柔らかいブロンドの髪が見えた、——その肉片を貪り食い、もろい骨が魔女たちの口の中でポリポリと音を立てて砕け、血が醜い唇から滴った。

Da stand ihm die metallene Tür der Tempelkammer offen, und die Knie wollten dem Armen brechen vor dem, was er mit Starren erblickte. Zwei graue Weiber, halbnackt, zottelhaarig, mit hängenden Hexenbrüsten und fingerlangen Zitzen, hantierten dort drinnen zwischen flackernden Feuerpfannen aufs gräßlichste. Über einem Becken zerrissen sie ein kleines Kind, zerrissen es in wilder Stille mit den Händen – Hans Castorp sah zartes blondes Haar mit Blut verschmiert – und verschlangen die Stücke, daß die spröden Knöchlein ihnen im Maule knackten und das Blut von ihren wüsten Lippen troff. (GKFA 5.1, 744f./ III, 683)

カストルプは、金縛りになりつつも、逃げようとする。魔女たちは、血まみれの拳をカストルプに向かって振り立て、声には出さないものの、「しかし、この上なく下等で淫猥な言葉で、しかも、ハンス・カストルプの故郷の方言で」(aber mit letzter Gemeinheit, unflätig, und zwar im Volksdialekt von Hans Casorps Heimat) (GKFA 5.1, 745/ III, 683) 罵った。

セテンブリーニとナフタによる概念では、この夢は、正当に理解することはできない。すなわち、この夢は、「形式」、「非形式/無形式」、「超形式」というカテゴリーを粉碎し、——ニーチェが『悲劇の誕生』(*Die Geburt der Tragödie*) で記述したように——アポローン (Apollon/Ἀπόλλων) 的なものとディオニュース (Dionysos/Διόνυσος) 的なものという神話学的・形而上学的な原理 (die mythisch-metaphysischen Prinzipien des Apollinischen

und Dionysischen)に取り換えたのである。ニーチェによれば、ギリシア人は、陶酔、苦痛、快楽の中で人間を引き裂くディオニューソス的なものの恐怖を、光、尺度、明晰さというアポローンの夢によって、置き換えている。

今や、いわばオリュンポス (Olympos/'Ολύμπος) の魔法の山がわれわれの眼前に開かれ、その根底を示すのである。ギリシア人は現存在の脅威と恐怖を知っており、感じていた。そもそも生きていられるためには、ギリシア人はこの脅威と恐怖の前面にオリュンポスの神々という燦然たる夢の産物を立てて置かざるをえなかったのである。[……]生きていられるためには、ギリシア人はこれらの神々を最深の心の逼迫から創造せざるをえなかったのである。この経過をわれわれは次のように想像すべきであろう。すなわち、根源にはティーターン (Titan/Τιτάν) 族による脅威の神々の秩序があり、そこからあのアポローンの美的衝動によってゆるやかな推移を経て、オリュンポス的な喜びの神々の秩序に発展したのである [……]。

Jetzt öffnet sich uns gleichsam der olympische Zauberberg und zeigt uns seine Wurzeln. Der Grieche kannte und empfand die Schrecken und Entsetzlichkeiten des Daseins: um überhaupt leben zu können, mußte er vor sie hin die glänzende Traumgeburt der Olympischen stellen. [...] Um leben zu können, mußten die Griechen diese Götter, aus tiefster Nötigung, schaffen: welchen Hergang wir uns wohl so vorzustellen haben, daß aus der ursprünglichen titanischen Götterordnung des Schreckens durch jenem apollinischen Schönheitstrieb in langsamen Übergängen die olympische Götterordnung der Freude entwickelt wurde [...].

したがって、カストルプの夢は、多層的な混淆物 (mixtum compsitum) である。すなわち、ここにおいて、カストルプの「意志」(Wille) は、アポローンの光のヴィジョンとディオニューソス的な夜のヴィジョンからなる夢を見るのである。これによって、小説は超越される。すなわち、カストルプは、「マーヤのヴェール」(Schleier der Maja) (IX, 550) 引き裂くのである。カストルプは、「魔法で化かされて」(Verzauberung), これまでの想像を超えていくのだ。

そのとき、私たちが目にする楽園は、地中海のどこかにあるというだけのものではない。ブナやカエデが生い茂る「故郷の息吹き」(Heimatodem) には、カストルプのドイツの故郷も一役買っている。この楽園はどこにでもあるもののなのだ。また、カストルプの故郷の方言で魔女たちが恐ろしいことをささやくことも、あるヴィジョンの偏在と拘束を示している。すなわち、魔女たちのこの「恐ろしいのしりのささやき」(scheußliche Flüstereien) (GKFA 5.1, 745/ III, 683) は、ニーベルハイムの「運命の女神」ノルネたちのささやきと同じものののだ。

半ば目覚めつつ、カストルプは、「人間についての夢のような詩」(Traumgedicht vom Menschen) を、次のように解釈する。

僕は僕の思考に対する支配権を死に譲るまい。そこにこそ善意と人間愛があり、その他のどこかにあるといういったものでもないのだから。死は大きな力だ。死の近くでは人は脱帽して、爪先立ち身を揺すって前進する。死はかつてありしものの尊厳を示す襟飾りをつけ、人も死に敬意を表して厳めしく黒を装う。理性は死を前にすると愚かしい存在になる。なぜなら、理性は美徳以外の何ものでもないが、死は自由、放逸、奇形、そして逸楽だからである。死は逸楽であって、と僕の夢は言う、愛ではない。死と愛、——これはまずい押韻だ。無趣味な、誤った組み合わせだ。愛は死に対立する。理性ではなく、愛のみが死よりも強いのである。理性ではなく、愛のみが善意ある思想を与えるのだ。形式もまた愛と善意からのみ生まれる。分別あり友情ある共同体と美しい人間国家の形式と礼節が——血の宴を静かに慮って。ああ、僕はこのようにはっきりと夢に見、見事に「陣取りの統御」をしたのだ。僕はこれを忘れずにいよう。僕は心の中で死への忠誠を守ろう。だが、死と、かつてあったものに対する忠誠は、もしそれがわれわれの思考と「陣取りの統御」を規定するならば、ただ悪意と暗黒の情欲と人間への敵意を意味するにすぎないということを明白に記憶しよう。人間は善意と愛のために、その思考に対する支配権を死に譲り渡すべきでない。これで、僕は目が覚めていく……。

Ich will dem Tode keine Herrschaft einräumen über meine Gedanken! Denn darin besteht die Güte und Menschenliebe, und in nichts anderem. Der Tod ist eine große Macht. Man nimmt den Hut ab und wiegt sich vorwärts auf Zehenspitzen in seiner Nähe. Er trägt die Würdenkrause des Gewesenen, und selber kleidet man sich streng und schwarz zu seinen Ehren. Vernunft steht albern vor ihm da, denn sie ist nichts als Tugend, er aber Freiheit, Durchgängerei, Uniform und Lust. Lust, sagt mein Traum, nicht Liebe. Tod und Liebe, – das ist ein schlechter Reim, ein abgeschmackter, ein falscher Reim! Die Liebe steht dem Tode entgegen, nur sie, nicht die Vernunft, ist stärker als er. Nur sie, nicht die Vernunft, gibt gütige Gedanken. Auch Form ist nur aus Liebe und Güte: Form und Gesittung verständig-freundlicher Gemeinschaft und schönen Menschenstaats – in stillem Hinblick auf das Blutmahl. Oh, so ist es deutlich geträumt und gut regiert! Ich will dran denken. Ich will dem Tode Treue halten in meinem Herzen, doch mich hell erinnern, daß True zum Tode und Gewesenen nur Bosheit und finstere Wollust und Menschenfeindschaft ist, bestimmt sie unser Denken und Regieren. *Der Mensch soll um der Güte und Liebe willen dem Tode keine Herrschaft einräumen über seine Gedanken.* Und damit wach' ich auf.. (GKFA 5.1, 748/ III, 685f.).

カストルプは、章の末尾のコメントにもかかわらず、「幸福と恐怖の映像」(Glücks- und Schreckensbilder[])についての夢を「忘れる」(vergessen)ことはないだろう。というのも、カストルプは、実際、その夢を確かに覚えていたからである。その夢は、明確にカストルプの心に残っていたので、「永久に覚えている」(für immer weiß)のである。

道徳律の「善意と愛のために」(um der Güte und Liebe willen)という言葉は、これまで小説の中でいかなる役割も演じてこなかった愛という概念を含んでいる。すなわち、これまでは、愛は、快樂あるいは欲情と同じ意味を表していて、まさにエロース/タナトスによる墮落であったからである。価値を高められた概念は、人間的領域から生まれる。この観点から見れば、カストルプは、「形式」と「非形式/無形式」とのこれまでの緊張関係を飛び越えるのである。しかし、カストルプは、新しい洞察を行為に置き換えることができない。この洞察は、行動基準を伝えてはくれないし、政治的プログラムも示してはくれない。

ともかくも、カストルプは、二人の教育者による対照的なおしゃべりについての夢によって、高められる。

死と生——病気と健康——精神と自然、これは果たして矛盾するものなのだろうか？僕は、問う、それが問題だろうかと。いや問題ではない、高貴の問題も問題ではないのだ。死の放逸は生の中にあり、それなくしては生が生ではなくなるだろう。そしてその中間にこそ神の子たる人間の立場があるのだ、——放逸と理性のただなかに、——ちょうど人間の国家も、神秘的な共同体と吹けば飛ぶような個体との間にあるように。

Tod oder Leben – Krankheit, Gesundheit – Geist und Natur. Sind das wohl Widersprüche? Ich frage: sind das Fragen? Nein, es sind keine Fragen, und auch die Frage nach ihrer Vornehmheit ist keine. Die Durchgängerei des Todes ist im Leben, es wäre nicht Leben ohne sie, und in der Mitte ist des Homo Dei Stand – inmitten zwischen Durchgängerei und Vernunft – wie auch sein Staat ist zwischen mythischer Gemeinschaft und windigem Einzeltum. (GKFA 5.1, 747/ III, 685)

カストルプは、この時から自分が「対立物の主」(Herr der Gegensätze) (III, 685)と感じる。熱弁をふるう論敵者たちに知的にはそれ以上ついていくことができなくても、その後は、論敵者たちを適度に軽視する態度をとり、相手の話を遮ったり、まったくの「おしゃべり屋さん」(Schwätzerchen) (GKFA 5.1, 867/ III, 794)とみなしたりする——カストルプは、「話を結ぶと、一人前の男子として自分の主張を貫いた」(machte Punktum und ging seines Weges wie ein Mann) (GKFA 5.1, 883/ III, 809)。

さらに、この距離を明確にするために、メネーア・ペーパーコルン (Mynheer Peeperkorn) が登場する。ペーパーコルンは、秩序の外に立つ人物であり、ジャワ出身のオランダ人で、「有色人種めいたところ」(leicht farbige Nationalität) (GKFA 5.1, 827/ III, 758)があり、それゆえ、ヨーロッパの東部にも西部にも属していない。この〔ペーパーコルンという〕人物に比べると、〔セテンブリーニやナフタのような〕議論を吹きかける哲学者たちは、取るに足りない知識人に「矮小化され」(verzwergen) てしまう (GKFA 5.1, 869/ III, 796)。すなわち、ペーパーコルンは、エッセ (esse) を代表しているのであって、オ

ペラーリ (operari) を代表しているのではない、すなわち存在 (das Sein) を代表しているのであり、意見 (das Meinen) を代表しているのではないのだ——ペーパーコルンは、弁じることができないし、その気もまったくない。話しぶりは、会話になっていない非言語 (Un-Sprache) とでも評される。ペーパーコルンは、言葉によって偉大なのではなく、活力 (Vitalität) や生命力や享楽力によって偉大なのである。

ペーパーコルンが、クラウディア・ショーシャを同伴者として連れてくるということで、カストルプとヴェーザルとの恋の競争を拭い去ってしまう。カストルプは、競い合うのとは違い、すぐに新しい状況に順応する。クラウディアに左右されることもなくなって、しかし、それだけますます強くオランダ人の発散する魅力の虜になっていく。クラウディアからの解放は、本来、「魔の山」の領域からの退出となるはずであった。というのも、カストルプは、エロースによってからかわれ、待期の期間にも、欺かれていたからである。その代わり、いまでは、大人物の秘密がどこにあるのかを見つけ出そうと思っている。その際、エロースの新たな種類を発見する。すなわち、それは偉大な人物の模倣/マネビ (imitatio) である。

ペーパーコルンは、まず明らかに、ゲーテの後継者である。すでに『考察』(*Betrachtungen*) の中で、ついで、『ゲーテとトルストイ』(*Goethe und Tolstoi*) でも、トーマス・マンは、ゲーテを、「偉大な造形家にして自然に対して敬虔な人物」(große[] Plastiker[] und Naturfromme[]) (GKFA 13.1, 550/ XII, 506), 「生に対する畏敬の念」(Lebensandacht) (GKFA 13.1, 549/ XII, 505) を持つ男として記述し、その際、ゲーテを異教徒、その「自然の高貴さ」(Naturadel), その素朴さ (GKFA 13.1, 843/ IX, 88f.) をキリスト教の禁欲に対立させた。ちなみに、これらの対立項は、すでに『精神と芸術』(*Geist und Kunst*) (1909年) の覚え書きの中で書き留められている。そこには、ゲーテが、観照 (das Schauen) を、語りや意見 (das Reden und Meinen) の上に置いたこと (GKFA 13.1, 550/ XII, 506 を参照) も示されている。

ペーパーコルンは、享楽を説き、祝祭を愛し、液体となった穀物、自然の豊かな賜物をすべて味わう。ペーパーコルンが範を示すのは、「感情を大事にする宗教的義務」(*religiöse Verpflichtung zum Gefühl*) (GKFA 5.1, 913/ III, 836) である。ペーパーコルンの自然との結びつきが最も明瞭になるのは、一種の「異教の司祭」(Heidenpriester[]) (GKFA 5.1, 941/ III, 863) として、滝の前で踊り、いわば、四大と合一するときである。恍惚としたこの自然神秘主義の特徴は、ゲーアハルト・ハウプトマンを指し示している。ハウプトマンは、実際に、みずからをゲーテの後継者であるように様式化しようとしていた。二人の知的「おしゃべり屋」(Schwätzer) (GKFA 5.1, 747/ III, 685) と対立しうる人物を探していたトーマス・マンは、1923年に休暇中で滞在していたボーゼンで、ハウプトマンに出会って、酒を酌み交わしたとき、突然「この人物だ!」(Das ist er!) とひらめいたことを報告していた。オランダ人の人物像は、とりわけこの出会いの時から、コミカルな特徴を含んでいる。トーマス・マンは、確かに、ハウプトマンを自然の司祭として賛美したけれども、ハウプトマンには、他人に理解できるように説明する能力が欠落しているために、

面白い人物として描く機会を逃すこともしなかった——マンは、とりわけ『ゾアーナの異教徒』(*Der Ketzer von Zoana*) (1918年)を読んだ際に、ハウプトマンのもうろうとした自然神秘主義に出会ったのかもしれない。おまけに、ハウプトマンは、ゲーテの後継者としてマンの妨げとなった。マンはみずから最も偉大な人物になりたかったのである。その点から明らかになることは、ペーパーコルン描写が、敬意と王様殺しとの奇妙な結合であることだ。

神話学的に見ると、ペーパーコルンは、ディオニューソスとキリストとの混合物である。血のような葡萄酒がシャツの上にこぼれ、陶酔と苦悩、快楽と苦痛を暗示するとき、尊敬される人物は、おのれの身を引き裂く神として現れる。すなわち、ペーパーコルンは、人工の蛇から出る毒液をみずからに注射したのである。同時に、ペーパーコルンは橄欖山のキリストでもある。ベルクホーフの十二人の客人を招いた宴会は、最後の晩餐である。死の床で、ペーパーコルンは、「首を傾けて」(*mit schläg geneigtem Kopf*) (GKFA 5.1, 944/III, 865) 横たわっている——それは、「十字架ニカケラレタ人」(*Crucifixus*)の姿勢である。

ディオニューソスとキリストの結合は、最後の手紙に「ディオニューソス」と「十字架にかけられし者」(*Der Gekreuzigte*)と署名したニーチェを指し示している。それはまたゲーアハルト・ハウプトマンを指し示している。トーマス・マンは、1952年にも、ハウプトマンについてこう書いている。「十字架にかけられた者、ディオニューソスは、この魂の中で、合一している。ニーチェにおけるがごとくに。——受難の男、ゲッセマネの男、神聖な踊りで衣装をからげる異教の司祭のごとくに……」(*Der Gekreuzigte und Dionysos waren in deser Seele mythisch verrinigt, wie in derjenigen Nietzsche's, —der das Gewand im sakralen Tanze raffende Heidenpriester...*) (IX, 812)

ペーパーコルンとの出会いも、カストルプを行動的な人間に変えることができない。カストルプは、小説の結末近くで、「はなはだしい鈍感さ」(*der große Stumpfsinn*)、「途方もないいらだち」(*die große Gereiztheit*)に襲われる。これにより、時代—現象 (*Zeit-Phänomen*)も指し示されていることになる——カストルプは、すでに以前から、実際に、著者の意思に従って、ヨーロッパの戦前の社会の代表者になっていた。トーマス・マンは、1919年に、初期の原稿に書き込んだ節の中で、「人間というものは」(*Der Mensch*)と述べている。

個々の存在として個人的生活を送っていくのみならず、意識的あるいは無意識的に、自分の生きている時代の生活や自分の同時代の生活をも生活していくものである。[……] 私を取り巻く非個人的なもの、つまり時代そのものが、外見上ははなはだ活気に富んでいても、その実、内面的には希望も見込みもまったく欠いているというような場合には [……]、そういう状況は、必然的に、普通以上に誠実な人間にある種の麻痺作用を及ぼさずにはおくまいと思う [……]。「何のために」という質問に対して、時代が納得のいく返事をしてくれないというのに、現在与えられているものの力

量を上回るほどの著しい業績を挙げようという気持ちになるのには、ごくまれな、あの英雄的な性格を持った精神的な孤独と直截さか、あるいは恐るべき生命力が必要であらう。

Lebt nicht nur sein Persönliches Leben als Einzelwesen, sondern, bewußt oder unbewußt, auch das seiner Epoche und Zeitgenossenschaft [...]; wenn das Unpersönliche um ihn her, die Zeit selbst der Hoffnungen und Aussichten bei aller äußeren Regsamkeit im Grunde entbehrt, wenn sie sich ihm als hoffnungslos, aussichtslos und ratlos heimlich zu erkennen gibt [...], so wird gerade in Fällen redlicheren Menschentums eine gewisse lähmende Wirkung solches Sachverhalts fast unausbleichlich sein [...]. Zu bedeutender, das Maß des schlechthin Gebotenen überschreitender Leistung aufgelegt zu sein, ohne daß die Zeit auf die Frage Wozu? eine befriedigende Antwort wüßte, dazu gehört entweder eine sittliche Einsamkeit und Unmittelbarkeit, die selten vorkommt und heroischer Natur ist, oder eine sehr robuster Vitalität. (GKFA 5.1, 53f. / III, 50)

英雄的でもなく、恐るべき生命力もないカストルプは、小説の末尾で、麻痺状態に陥る。「楽音の泉」(Fülle des Wohllauts)の章で、カストルプは、「非形式/無形式」の響きに、度を越して身をゆだねてしまう。ついには、生の強大な大波によって、「病室の窓の外側に設置された、新鮮な空気を吸い、陽光を浴びるための治療ベッドのある」「バルコニー」(Balkonloge) (III, 231) から連れ出され、意志とは無関係に、戦場へ押しやられる。カストルプが戦争に参加するのは、道徳的決意によるものではない。カストルプは、『菩提樹』の歌(das Lied vom Lindenbaum)を口ずさみ、死との共感をこころに秘めて、戦場に送り込まれる。小説の最後の文章は、美しい夢を退けている。

さようなら——君が現実には生きているにせよ、あるいは単なる物語の主人公としてとどまるにせよ、これでお別れだ。君の未来は明るくはない。君が巻き込まれた邪悪な舞踏は、まだ何年もその罪深い踊りを踊り続けるだろう。君がそこから無事で帰ることはあまり期待すまい。正直なところ、その質問は疑問としてあまり気にしないことにしているのだ。君が味わった肉体と精神の冒険は、君の単純さを高め、君が肉体においてはおそらくこれほど生き永らえるべきではなかったろうに、君をなお精神の世界において生き延びさせてくれたのだ。君は「陣取りの統御」によって、死と肉体の放縦との中から、予感に充ちて愛の夢が生まれてくる瞬間を経験した。この世界を覆う死の饗宴の中から、雨の夜空を焦がしているあの恐ろしい熱病のような業火の中から、そういうものの中からも、いつかは愛が生まれ出てくるだろうか？

Fahr wohl—du lebest nun oder bleibest! Deine Aussichten sind schlecht; das arge-Tanzvergnügen, worein du gerissen bist, dauert noch manches Sündenjährrchen, und wir möchten nicht hoch wetten, daß du davonkommst. Ehrlich gestanden, lassen wir

ziemlich unbekümmert die Frage offen. Abenteuer im Fleische und Geist, die deine Einfachheit steigerten, ließen dich im Geist überleben, was du im Fleische wohl kaum überleben sollst. Augenblicke kamen, wo dir aus Tod und Körperunzucht ahnungsvoll und regierungsweise ein Traum von Liebe erwuchs. Wird such aus diesem Weltfest des Todes, auch aus der schlimmen Fieberbrunst, die rings den regnerischen Abendhimmel entzündet, einmal die Liebe steigen? (GKFA 5.1, 1085/ III, 994)

愛。それは、カストルプが、雪の中の夢から道徳にかかわる結論を引き出した命題と関連がある。この命題は確かに洞察を含んでいるが、小説の結末には何の影響もないままである。

「音楽的ニーチェ祭のための序詞」(*Vorspruch zu einer musikalischen Nietzsche-Feier*) (1924年)の中で、トーマス・マンは、小説の結末を曖昧にしないことを考えた。マンは、そこで、明らかにカストルプをほのめかしつつ、ニーチェの「教育的統御の疑念と良心の疑い」(*erzieherische Regierungs- und Gewissenszweifel*)について語っている。ニーチェは、自己自身の中のロマン主義的なものを自己克服することによって「革命的な自己克服者」(*revolutionäre[r] Selbstüberwinder*)となったのです(X, 182-184; 1926年5月25日付エルンスト・フィッシャー [Ernst Fischer]宛て書簡を参照; Br I, 255f.)。ヴァーグナーは、単なる時代の完成者でしたが、ニーチェは「予見者であり、新たな人間の未来への導き手」(*ein[] Seher und Führer in neue Menschengestaltung*)でありました。

私たちのうちにあって、生と未来の妨げとなるもの一切を克服する教師でありました。と申しますのも、ロマン主義的なものは、過去への郷愁の歌、死へと魅了する歌、ヴァーグナーという現象でした。この現象を、ニーチェは、果てしもなく愛したのために、みずからを統治する精神によって、克服しなければなりませんでした。この現象は、世界を支配した死の陶醉という逆説的で永遠に興味の尽きない現象でした。(……) 私たちは、魂の魔術師として、郷愁の歌に巨大な意味を付与することによって、世界を征服したのかもしれません。(……) その最良の息子は、やはり、私たちすべてに該当する人物であったのかもしれません。その最良の息子は、私たち全員にとって、克服する中で人生を使い果たし、死んだ一人であったのかもしれません。その唇には、本人がほとんど話す術を知らず、私たちもほとんど口ごもることしかできない新しい言葉、人生に対する友情と未来の予言的な言葉があったのです。

Ein lehrer der Überwindung all dessen in uns, was dem Leben und der Zukunft entgegensteht, das heißt des Romantischen. Denn das Romantische ist das Lied des Heimwehs nach dem Vergangenen, das Zauberlied des Todes, und das Phänomen Richard Wagner, das Nietzsche so unendlich geliebt hat und das sein regierender Geist überwinden mußte, war kein anderes als das paradoxe und ewig interessante Phänomen welterobernder Todestrunkenheit. [...] Man mochte als Seelenzauberkünstler dem

Heimwehliede Riesenmaße verleihen und die Welt damit unterwerfen. [...] sein bester Sohn mag doch derjenige gewesen sein, der, für uns alle, in seiner Überwindung sein Leben verzehrte und starb, auf den Lippen das neue Wort, das er noch kaum zu sprechen wußte, das auch wir kaum zu stammeln wissen, das prophetische Wort der Lebensfreundschaft und Zukunft. (X, 182f.)

こうして、ニーチェは、「地上と人間の新しい同盟の(……)福音伝道者」(Evangelist[[...] eines neuen Bundes von Erde und Mensch)になった。ハンス・カストルプは、この福音を正しく認識することができなかった。その著者にとって、これは反対の衝動(Gegenimpuls)となった。トーマス・マンが、ロマン主義的なものの魅惑から逃れることができなかったとしても、ニーチェの「生に対する肯定」(Lebensja) (1918年9月21日付エルンスト・ベルトラム [Ernst Bertram] 宛書簡; BrB, 76) は、マンにとって、反対の力(Gegenkraft)を意味した。これは、マンが、ゲーテ、フロイトから、そしてケレーニイ(Karl Kerényi)のヘルメース像から導き出した洞察でもあった。

ジャンルの要請

最終節では、「高揚」(Steigerung)という言葉が繰り返し、そして最後に使われる。この概念は、多くの混乱を引き起こした。罪は、とりわけトーマス・マンの自己注釈にある。1921年以来、マンは、この小説を、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』(Wilhelm Meister)と比較してきた(1921年6月15日付日記)。(マンは、その際、慎重に表現を選び、『魔の山』を「教養小説、発展小説の路線、ヴィルヘルム・マイスターの路線を継続する[……]、試み」(Versuch [...], die Linie des Bildungs- und Entwicklungsromans, die Wilhelm Meister-Linie)と呼び、「一種の教養物語、ヴィルヘルム・マイスター風のもの」(eine[] Art von Bildungsgeschichte und Wilhelm Meisteriade)について語っている。1939年に、プリンストン大学の学生の前で行われた講演『『魔の山』入門』(Einführung in den ›Zauberberg‹)で、マンは「高揚」を根本テーマと呼んでいる。すなわち、魔の山という熱病に侵された錬金術の世界の中で、単純な主人公は、「道徳的、精神的、感覚的な冒険への」(zu moralischen, geistigen und sinnlichen Abenteuer)能力を与える「錬金術的」(alchimistisch)な変化を経験する。それは、「低地」(Flachland)では夢想だにしなかったことである(XI, 612)。これはすべて、冒険小説や「秘儀伝授小説」(Initiationsroman[])の領域により近い(XI, 614)。そして、実際にも、カストルプは、病気と死とオカルト体験による冒険に耐えるとき、ヴィルヘルムよりは、はるかに、ガウェイン〔ガーヴァイン〕(Gawein), ガラハッド〔ガラハート〕(Galahad), ペルスヴァル(Perceval)に似ている(DüD I, 570を参照)。カストルプの高揚は、ゲーテの意味での形成(Bildung)ではない。それは、錬金術的・フリーメーソンのイメージと概念においては、啓発、「精錬、物質の変化と醇化、化体」(Läuterung, Stoffverwandlung und Stoffveredelung, Transsubstantiation), 「外的な影響力による昇華」(Hinauftreibung durch äußere Einwirkungen)

(GKFA 5.1, 770/ III, 705), 「密封的」(hermetisch)あるいは「錬金術的・密封的教育法」(alchimistisch-hermetische Pädagogik) (GKFA 5.1, 770, 902/ III, 706, 827)の所産と言われ表される。それに対して、ゲーテの教育は、「理想」(Inbild[])の形成、神秘的で、分割できない個人の形成に存する(ベーメ Böhme)。それはエンテレヒー(Entelechie), すなわち、すでに自分の中にある目標に向かう動きである。したがって、教養小説という概念は、元来、酷使されてきたのだが、『魔の山』には適用できない。実際に、この物語には、ジャンルの外見的特徴すらすでに欠けている。主人公は人格を持たず、受動的・反省的に行動する。主人公が努力する目標は、本人にも著者にも明らかではない。事実また、カストルプは、職業に就くこともなく、[ヴィルヘルム・マイスターのように「美しき魂」の持ち主である]ナタリーエを見つけることもなく、家庭を築くこともない。反対に、カストルプは、外部から、あるいは夢の中で、自分に向けられたさまざまな実験によって、「非形式/無形式」の世界の虜になる。小説は、著者の努力にもかかわらず、すなわち、1919年以降、回顧的な形で解釈のし直しをしたにもかかわらず、没落の物語、人格消失の物語(die Geschichte der Depersonalisation)のままである。

『魔の山』は、社会小説にはならなかったし、ワイマル共和国の小説にもならなかった。トーマス・マンは、明らかに、個人的・心理学的アプローチを社会的・代表的なものへと拡大しようと奮闘していた。「社会的な側面は、私の弱点です」(Daß das Soziale meine schwache Seite ist), と、マンは1925年4月23日付ユーリウス・バーブ(Julius Bab)宛ての書簡の中で書いている——バーブは、この小説に批判的な書評を提示していた。

— 私はこのことを十分に承知していますし、また、社会的なものを要求し、それを伴う長篇小説という私の芸術形式そのものと、私の弱点との間に、ある種の矛盾を感じていることも知っています。しかし、個人的なもの、形而上的なものの魅力(Reiz)——私はまことに軽率にもそう表現してしまうのですが——は、私にとって、どうしても比較にならないほど大切なものなのです。確かに、長篇小説というものは、社会小説であるでしょう。そして、『魔の山』も、ある程度ですが、まったくひとりでにそのようなものになりました。戦前の資本主義の時代のいくつかの批評が紛れ込んでいます。ですがもちろん、それは私にとりましては「異質な」ものです。生と死の意味の網状組織、音楽が、私にとりまして、非常に、非常に重要なものなのです。

— ich bin mir dessen voll bewußt und weiß auch, daß ich mich damit in einem gewissen Widerspruch zu neiber Kunstform selbst, dem Roman, befinde, der das Soziale fordert und mit sich bringt. Aber der Reiz—ich drücke es ganz frivol aus—des Individuellen, Metaphysischen ist für mich nun einmal unvergleich größer. Sicher, Roman, das heißt Gesellschaftsroman, und ein solcher ist der Zbg. Bis zu einem Grade ja auch ganz von selbst geworden. Einige Kritik des vorkriegerischen Kapitalismus läuft mit unter. Aber freilich, das ›andere‹, das Sinnflecht von Leben und Tod, die Musik, war mir viel, viel wichtiger. (Br I, 238)

ベルクホーフの社会は、病人たちの社会である。著者の意志によれば、そういう社会は、見込みのない、未来のない戦前の世代を代表していることになる。この世代は、ニーチェとショーペンハウアーによって、ニヒリズムとペシズムが強化されていることに気がついている。しかし、この世代は本当に代表的なのだろうか？ 『魔の山』が世に出たとき、すぐに「生に敵対するもの」(Lebensfeindschaft)という非難が降り注いだ。「陣取りの統御のさまざまな試み」([die] Regierungsversuche)は、この小説を善意の本であるかのように見せたが、何の影響も与えなかった。もし作者が「生に友好的」(Lebensfreundlichkeit)であることを主張しながら、同時に悲観的で虚無的な態度を放棄できなかったとしたら、それは何の役に立つただろうか？ ヨーゼフ・ポンテン(Josef Ponten)がそういう質問をしたとき、トーマス・マンは、1925年2月5日付の書簡で次のように書いた。カストルプは、

感覚的、精神的に死(神秘、ロマン主義)に夢中になっています。がしかし、このゆゆしき愛は、少なくとも、瞬間的に、啓示を受けたように、新しい人間愛の兆しへと浄化されるのです。銃剣による攻撃に、カストルプは引きずり込まれますが、この人間愛は、萌芽としてカストルプの心の底にあります。カストルプを去らせる著者は、小説の外へ出て、『ドイツ共和国について』という声明文のような講演原稿を起草した人間と同じ人物です。この人物は、心の内では決してセテンブリーニではありません。ですが、思想的には、自由で、理性的で、善良でありたいと思っています。それこそ、私が善意と名づけたいものです。そして、生に敵対するものと呼ばれているもののことを耳にすることが、私は、どうしても好きにはなれないのです。

Sinnlich und geistig verliebt in den Tod (Mystik, Romantik); aber diese schlimme Liebe läutert sich wenigstens moment- und erleuchtungsweise zu einer Ahnung neuer Humanität, die er als Keim im Herzen trägt, während der Bajonettangriff ihn mit sich reißt. Sein Autor, der ihn entläßt, ist derselbe, der, aus dem Roman heraus, den Aufruf »Von deutscher Republik« verfaßte. Er ist in seinem Herzen kein Settembrini. Aber er will in seinen Gedanken frei, vernünftig und gütig sein. Das ist es, was ich guten Willen nennen möchte, und was ich ungern Lebensfeindschaft nennen höre. (Br I, 232)

しかし、これは生のちから(Lebenskraft)によるものだろうか？ トーマス・マンが死の魅惑に対置させるものは、フモール(Humor)である。とにかく、このフモールの助けを借りて、ペシズムとニヒリズムによって麻痺させられない試みに、マンは、成功する。しかし、ペシズムとニヒリズムは、フモールによって打ち負かされることはない。この勝利は、せいぜい、崩壊衰退没落(Verfall)が形成されることによって、それが、芸術的に克服されることでしか達成されないのだ。

(1986年6月1日編集終了)。

ハンス・ヴィスリング

【テキスト】

- (1) Hans Wysling: *Der Zauberberg*. (2) In: H. Koopmann (Hrsg.): *Thomas-Mann-Handbuch*. Stuttgart: Alfred Kröner Verlag 1990, S. 408-421.
- (2) Hans Wysling: *Der Zauberberg*. (2) In: Helmut Koopmann (Hrsg.): *Thomas-Mann-Handbuch*. Frankfurt a. M.: S. Fischer Taschenbuch Verlag 2005, S. 408-421.
- 上記の(2)は(1)のライセンス版であり、内容は同じである。

【付記】

〔……〕内は訳者注。

翻訳 (1) の訳中の用語「過剰形式」を「超型式」に変更します。

【参考文献】

トーマス・マンの作品からの引用（訳文）に関しては、下記邦訳を参照させていただいた。

- －『トーマス・マン全集』全13巻（12巻＋別巻）新潮社 1971-72年
- －トーマス・マン『魔の山』（筑摩世界文学体系61）佐藤晃一訳 筑摩書房 1971年
- －トーマス・マン『魔の山』I・II（世界文学全集 67・68）圓子修平訳 1980年
- －トーマス・マン『魔の山』上・下 関泰祐・望月市恵 岩波文庫 ³1990年
- －『トーマス・マン 日記』（1918-1921年, 1933-1955年）全10巻 紀伊國屋書店 1985-2014年
- －高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店 ⁷1971年
- －田中秀央・落合太郎編著『ギリシア・ラテン引用語辞典』新增補版 岩波書店 ¹³1979年
- －Thomas Mann: *Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Werke-Briefe-Tagebücher*. Hrsg. von Heinrich Detering, Eckhard Heftrich, Hermann Kurzke, Terence J. Reed, Thomas Sprecher, Hans Rudolf Vaget und Ruprecht Wimmer. Frankfurt a. M.: S. Fischer 2001 ff. (=GKFA)
- －Thomas Mann: *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*. Hrsg. von Hans Bürgin und Peter de Mendelssohn. 2. Auflage. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1974. (=GW)
- －Thomas Mann: *Dichter über ihre Dichtungen*. 3 Bde. Hrsg. von Hans Wysling und Marianne Fischer. Zürich/München/Frankfurt a. M.: Heimeran 1975-1981. (=DüD)
- －Thomas Mann: *Briefe*. Bd. I: 1889-1936, Bd. II: 1937-1947. Bd. III: 1948-1955 und Nachlese. Hrsg. von Erika Mann. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1961-1965. (=Br)
- －Thomas Mann: *Die Briefe Thoma Manns. Regesten und Register*. Bd. I. 1889-1933. Be-

- arbeitet und herausgegeben, unter Mitarbeit von Yvonne Schmidlin (Thomas Mann-Archiv) von Hans Bürgin und Hans-Otto Mayer. Mit einem Vorwort von Hans Wisling. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1976. (=Reg)
- Thomas Mann: *Thomas Mann an Ernst Bertram. Briefe aus den Jahren 1910–1955*. Hrsg. von Inge Jens. Pufflingen: Neske 1960. (=BrB)
- Thomas Mann: *Tagebücher 1911–1921 und 1933–1943*. Hrsg. von Peter de Mendelssohn. *Tagebücher 1944–1955*. Hrsg. von Inge Jens. 10 Bände. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1977–1995. (=Tb)
- 樋口忠治: *Higuchi GM Corpus. Text database von J. W. Goethe und Thomas Mann*. Supported by the Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University. (Access Number 19620. This site was opened on April 1st, 1999 and moved to the flc domain on April 14th, 2016)